第2087回　(2011.3.23(水)　晴れ)　　NO.1467

Yonago East Weekly

●創立／1968年4月24日　●事務所／米子市西福原1-1-55 ホテルサンルート米子 TEL(0859)32 - 5531
●例会日／水曜日12:30～13:30　●例会場／ホテルサンルート米子市西福原1-1-55 TEL(0859)33-0911
●会長／井上賢明　●幹事／岩崎　浩　●会報／荒川圭三

出席報告
会員数78名

今週のお祝い
結婚記念祝:7日　足立博俊君　7日　杉本真吾君　7日　植田三男君　12日　木美俊彦君　17日江原保君　20日　長棟信泰君　30日　加来正年君

会長挨拶

今日から高校野球選抜大会が始まります。震災で開催が危ぶまれていましたが開会式が挙行されました。例年よりは簡素化された開会式で、東北高校が名前を呼ばれると大きな歓声と拍手が沸きあがり、観客席に多くの励ましのプラカードが見えました。選手宣誓も胸が熱くなるようないい宣誓で、一歩一歩震災への支援も進んでいるように思います。

国の内外を問わず大きな支援や募金活動も進んでおりますが、まだまだ被災地では寒い中体を寄せ合って頑張っておられます。みんなでこの困難を乗り切っていかなければと思います。

先週、臨時理事会を開催し義援金の金額を決めさせて頂き、50万円をガバナー事務所に米子東ロータリークラブとして拠出いたしました。まだ心の中に重いものがのしかかっておりますが一歩一歩前進していかなければという思いの年度末です。芸場ロータリークラブへ訪韓してまいりますので、4月の例会ではその報告も出来ると思います。

幹事報告

1. 中山晴文君、長谷川進君入会
2. 東日本大震災被災地区義援金、クラブとして50万円寄付(臨時理事会にて決定)
3. 4月ロータリーレート1ドル80円
4. 例会変更のお知らせ
   米子南RC4/4(月)夜間例会に変更
   ビジター受付あり

行事予定

4/17(日)インターシティミーティング(IM)
ハワイアロハホール
4/24(日)地区協議会　倉吉未来中心
4/24(日)事務局員研修会　倉吉未来中心他
5/25(水)新旧引継ぎクラブ協議会

次回プログラム

4月6日「社員に教える「仕事と社会貢献」
八幡物株式会社　社長　八幡清志氏
13日「ロータリーの友」紹介
雑誌委員会　足立博俊　リーダー
「私の職業」
遠藤　智美会員

Let's Join!
すすんで参加しよう！

≪ プログラム ≫

「家で死にたい ― その想いを 叶えるために ― 」

野坂 美仁 会員

父のあとを継ぎ開業して20年経ちます。自分が見た患者さんを看取るのは自然の流れだと思っていましたが、開業してから死亡診断書を書いたことがない先生が何人かおられる話を聞きました。お年寄りに最後どこで死にたいかという話をすると、皆自分の家で死にたいよと言われますが病院のベッドで亡くなっていかれます。昨年、西部医師会の勉強会で、死ぬときの話をしておかないと不幸になるという話しが出ました。家で死にたい希望を叶えるために医療者・家族・本人がどうすればいいかを話したいと思います。

人間必ず死にます。実際にその時になると家族は不安・介護の負担があり、病院へ行けば安心だと思われますが、病院は治療の場であり看取りの場ではないのではないでしょうか。日本人の三大死因は癌・心臓・脳血管障害です。明治では肺炎・結核・脳血管疾患・胃腸炎・老衰でした。老衰はどんどん数が減っています。戦後日本人は死について考えなくなってきました。何かあったら病院でという先延ばしが今の状況かと思います。ヨーロッパでは食事が出来なくなったお年寄りはある施設に入られるそうです。日本のように胃瘻や点滴はせず、ご飯を食べれなくなった人は自分の部屋から食堂まで歩けなくなり、そのまま眠るように亡くなる。みんなの目から消えていくような状況が多いと聞きます。病気の苦痛と死ぬことは次元がちょっと違うのではないでしょうか。死ぬことに関しては苦が無いと思います。あと臨死の身体状況の変化を見たことがなく未知だから怖いのだと思います。昔は家で看取るのでそんなに怖くなかった。今は1割強の人しか家で亡くなれないのが現実です。

今後の推計では次第に死亡者数が増え、病院に入ると治療を受ける人が入れなくなり在宅死は増加するでしょう。政府は終末期医療費が莫大なため終末期は在宅でと言い始めました。これは本末転倒だと思いますが、受身でなく当然の権利として家で死ぬ時にはそれなりの医療費を家族に分けてほしい。家で死ぬためには本人の強い意志と死に向き合う家族の覚悟、かかりつけ医が必要です。マンパワーを適切に配置して、大き目の部屋と経済的余裕、一番大切なのは家族に愛されていることです。看取りは人生を生き抜いた人の最後の壮大な儀式です。看取ることで残された人も満足感が得られます。死ぬのでなくあの世に行く見送りをみんながしないといけないのではないか。看取りの文化の再生を願っています。